

Title	ロボット発言事件を振り返って
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 5-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90061
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集 1 第5回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
 テーマ「人の生と研究をめぐる倫理」

ロボット発言事件を振り返って

堀江 剛

1. ロボット発言事件

プライマリーケアに関する発表を聞いて、当時大学院生（博士後期課程在籍）であった堀江は次のようなことを口走った。ケアするとき、意識ある人であれ、ない人であれ、あるいはロボットであれ、看護は何か反応して看護自身を作り出していく。ケアは、個々の変化に応じつつ新たな変化を生み出し、さらにその変化に応答する。この意味で、ケアは「オペレーション上で閉じている」。これは、看護の営みの固有性・自律性を考えるときの重要な視点になるのではないか。

ところが、この発言に対して、看護の人たちは一様に驚き、違和感を持った。また、ひとりの大学院生から「植物状態」という言葉について疑問が呈された。研究室の教員であった中岡は、このやりとりを（理論的な視点から原理的に思考を展開しようとし、ときに極端な思考実験を遂行する）「哲学」と（現場のリアリティに沿ってケアを遂行し、そこに自らのアイデンティティを見出す）「看護」との間に横たわる齟齬として捉え、臨床哲学の実験・課題として『ドキュメント臨床哲学』に記録した¹。

当時（1999年：臨床哲学研究室が設立されて間もない頃）、研究室には看護系の大学院生が多く在籍しており、いわゆる「金曜6限」の時間には大学の外部からも多くの看護関係者が「臨床哲学」というものに興味を抱いて集まっていた。そこでは、医療（キュア）とは別の営みとしての看護（ケア）を哲学の観点から擁護してくれるのではないか、という期待があった。堀江もこの期待を少なからず感じており、そうであればこそ、上のような「看護の独自の営み」を理論的に捉えることのできる視点の発見を喜び、たぶん結構得意げに発言した。

上の発言によって、その場で異論が噴出したわけではない。多くの参加者は「堀江は何を言いたいのだろう、よくわからない」といった反応であった。しかし、この後に幾人かの看護関係者が「臨床哲学」から離れていった（そこには「全人的なケア」を標榜する看護学の大家もいた）こともあり、中岡としては、看護と哲学の齟齬を象徴する「事件」として記憶に残っているのであろう。今回、20年以上の時間を経て、あらためてこの「ロボット発言事件」を振り返る機会を得た。以下、事件と関連させながら、堀江が臨床哲学をどのように

¹ 鷲田清一監修、本間直樹・中岡成文編集『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版会、2010年、12-31頁。

考えるようになったのか、また研究倫理についてどのように考えているのか、この2点について述べる。

2. 現場と関わる哲学

現場と哲学が関わり合おうとするのが臨床哲学である。臨床哲学に出会う前、すでに私は西洋近代哲学（特にスピノザ）や社会哲学（マルクスやルーマン）を通して、大学の「研究」には馴染んでいた。上の事件に触発されたわけではなく、臨床哲学研究室に入ってから「現場と関わる哲学」とは何かという課題を常に感じていた。そこで、あらためて（哲学の研究ではなく）「哲学する」とはどのようなことであり、それが「現場に関わる」とはどのようなことなのかについて、次のような私なりの答えを導き出した。

ケアする営みが「配慮する／される」ことの密接な連関・過程の場を作り出しているとするれば、それと同じように「哲学する」独自で固有な場を作り出せばよい。哲学の場合、それは「言葉にする／される」ことの密接な連関・過程の場を作り出すことである。そのように捉えればよいのではないか。人々が発する言葉（発言）に応じつつ、新たな言葉（発言）が生まれ、さらにその言葉（発言）に回答するような場所を作ればよい。何をテーマにするか、またどのような目的で言葉にするかは自由である。哲学はどんな事柄でもテーマにできる。専門的な哲学研究である／ないにかかわらず、人々が「哲学する」可能性を探ることができるのではないか。

しかし、発言された「言葉」に寄り添ってどれほど綿密に思考できるのか、また独りでではなく発言に参与する「みんな」でどれだけ深く思考できるのか。難しいかもしれないが、できないことはない。その大きな可能性を示してくれたのが、ロボット発言事件とほぼ同じ頃に出会った「ソクラテック・ダイアログ」であった。そこで私は、対話（言葉にする／されること）の媒介役に徹するし、そのような仕方現場の人々と関わることもできる。あるいはむしろ、そこに「哲学する現場」を作り出すことができる。

もちろんこの場合、ケアとは違って「言葉を使える」人しか関わるできない。そのような限界を持っている。しかし逆に言えば、言葉を使える（と思える）ものであれば、例えばAIのような機械（ロボット？）と一緒に「哲学する」こともできる。また、これは「言葉を使えない」人、あるいは「上手く言葉にできない」状況を排除するものではない。むしろ、このような限界づけによって、少なくとも言葉にできる／できないことの「齟齬」に触れ、そこから（言葉にする）思考を展開する可能性を持っている。

限界に関連して言うと「哲学する」ことは、いわゆる学術研究ではなく、それとは区別されなければならない。哲学・倫理学を含めた学術研究は、論文・研究発表・議論を含め、基本的に公表を前提とする。その過程で、情報の収集と確認、言葉の慎重な吟味が求められる。現場に関わる研究ができるとすれば、できる限り現場や現場に精通する人々の言葉を聴き、それに沿った理解に努める必要がある。同時に、自ら重要と思える視点に基づいて、事柄を

新たに（別様に）考える可能性を提示するのが「研究」である。これは常に上手くいくとは限らず、特に共同研究の場合は困難を極める。しかし、少なくともそれに挑戦することが臨床哲学における「研究」の意義であると考えた。

私の場合、医療や看護の現場の人々に関わることが多かった。そこで聴いたこと、重要だと感じたことが私の「研究」の土台となっている。これは『ドキュメント臨床哲学』でも触れたが、ロボット発言事件の前後にひとりの看護師から聞いた言葉があって、私はそこに「看護の力」を読み取っていた²。ロボット発言は、確かに「ロボット」という言い方に問題はあったにしても、いや、そのような問題を孕む言い方を通して、看護やケアを新たに（別様に）考える可能性を私は示そうとした。

3. 研究倫理の視点から

ところで、この事件を「研究倫理」と関連づけるとすれば、どんなことが考えられるのか。研究倫理が主に想定する枠組みは、公表を前提とした研究者／研究対象者の倫理的問題である。事件は「研究者／研究対象者」間ではなく、研究者（哲学／看護学）間に生じた齟齬であった。この点で、研究倫理の枠組みに直接当てはまる事例とは言い難い。しかし、研究対象（事件の場合、患者を含む看護ケア実践）に関わる「研究／非研究のコミュニケーション」の在り方、それを倫理的に問うという意味で、複雑な問題を潜在させている。

ロボット発言は、極端な思考実験としてケアを実践する人たちに「違和感」を与えた。ここには、研究のコミュニケーションが研究対象（者）に対して持つ「配慮の無さ」への違和感が含まれている。それは、ケア（する／される者）の中で培われているアイデンティティを脅かす可能性を孕んでいる。もちろん堀江の発言は、それを意図したわけではない。むしろ、ケア（看護）をキュア（医療）から分離・擁護する意図で差し出されたものであった。しかしそれは、ケアの営みを理論的に、つまり研究コミュニケーションの中で、一方的に同定（identify）したものでしかない。

また「植物状態」への疑問は、さらに広い意味でこの「配慮の無さ」に関係するものであった。この言葉は、医学研究の中で作られ一般にも流通するようになった、つまり非研究のコミュニケーションでも使われるようになった問題の用語である。研究のコミュニケーションが（意図されることなく）非研究のコミュニケーションへと流れ出し、その「配慮の無さ」が一般化してしまう。植物状態という言葉遣いは、ロボット発言と同様、研究のコミュニケーションが持つ無配慮を示している。

さて、この問題は「研究者の倫理的に慎重な配慮」によって回避できるのであろうか。今日の研究は、研究成果を含めた予算・ポストをめぐる苛烈な競争などを背後に抱え、研究対象（者）に対する無配慮を増大させている。研究倫理は、様々な倫理指針や倫理審査を通し

² 同掲書、25頁。

て、つまり研究活動を集団・組織レベルで制御する仕組みとして、これを抑えようとする。研究が、個人レベルの「配慮」による制御をはるかに超えた営みである以上、こうした仕組みは不可欠である。

しかし、それで十分ではない。と言うよりも、このような仕組みを設けるがゆえに、新たな（倫理）問題が生じる。私の見方では、研究倫理は基本的に次のような「置き換え」から成り立っている。つまり「研究対象（者）への配慮」を「手続きへの配慮」に置き換え、問題を処理するのである。しかも、これが「研究者の倫理的に慎重な配慮」という人（＝研究者）への帰責によって覆い隠される。この「置き換え」は組織や社会の必然的なメカニズムである。同時にそこには、研究のコミュニケーションが持つ「配慮の無さ」が不問に付されるという構造が伴う。

この「配慮の無さ」を（不問に付さず）問い続けるために何ができるのだろうか。ヒントはまさしく、ロボット発言事件が起こった臨床哲学「金曜6限」、それを記録した『ドキュメント臨床哲学』、そしてこの問題をあらためて取り上げた今回の「臨床哲学フォーラム」にある。つまり、研究／非研究のコミュニケーションをどのように交差させるか、それが「言葉にできる＝哲学できる」場をどのように作っていくかである。

4. おわりに

ケアにしても哲学にしても、その営みは、一つ一つの出来事と応答（＝オペレーション）から成り立っている。それを「人が」行なっている（あるいは「人に」行なっている）と、素朴に前提してしまってよいのだろうか。「人」とは、様々なオペレーションの場面で要請される「帰責の場所」に過ぎない。また、人に対して「全人 **whole person**」や「人間らしさ **humanity**」といった（不用意には否定できないような絶対的・普遍的な）価値が付与されるが、それによって覆い隠されるものがある。このことを、単純な（その場の思いつきの）発想で示してみたいがために、私は「ロボットであれ」と口走った。しかし口がすべったとは言え、そこには単なる「思考実験」以上の意味が私の中にはあった。

私は、「人」や「人間らしさ」といった前提をあえて取り外す考え方に魅了されてきた。その裏面で、つまり表面の「人への帰責」や「人の価値づけ」によって隠されているものにこそ、着目すべきなのではないか。それによって、事柄を「新たに（別様に）考える」可能性が開けてくるのではないか。今もそのように感じ続けている。

（ほりえ・つよし）